

# ちよつとしい話

## ～ 念々に捨てざるもの ～

法然上人が求められた「念々に捨てざるもの」とは一体何であつたのでしょうか。それは勿論、〔阿弥陀様の御名を称える事、日課称名念仏です。人間が極楽に行く為には念佛を称える事が正しい勤め（正定の業）である事を教示されたのが阿弥陀様自身であり、阿弥陀様の願いであるからです。〕と、法然上人はこの一文から浄土門をお開きになりました。念とは忘れる事無く思い続けて守り実行する事です。法然上人は忘れずに毎日念仏を称えられました。極楽往生、抜苦与楽を願わない上人はいません。有り難い事です。では、『我々は常に、何を修め、何を実践すれば善いのでしょうか？』現代社会の生活環境を想う時、私は各家庭に於いて、法然上人や各祖師の様に、一念發起して守るべき法を<sup>つちか</sup>培い、家庭生活をより良く営む為の家訓として常に念じ実践し続けなければいけない。「真髓の無い、信仰の無い」家庭は良くないと思います。道詠に「**いつまでもあると思うな親と金 ないと思うな病災難**」。人生にマッタはありません。決め事の無い家庭は安心して共に暮らせる社会に役立つ憲法を早く作るべきです。古くは聖徳太子の「十七条の憲法」、「家康の遺訓」、「美智子妃殿下の徳仁親王（なるチャン憲法）」等々それぞれの家庭には必ず思いを抱かず、忘れてはいけない憲法があつてしかるべきです。それは社会に共存する為のマナーでなくてはなりません。例えば、「正直であれ」、「おはよう、おやすみ、と言おう」、「親は子を、子は親を信頼する」、「命を大切に」、「人の嫌がる事をするな」、「社会のルールを守ろう」等々色々あると思います。各家庭の存在が社会に及ぼす影響には大なるものがあります。社会の基礎となる家庭生活の営みは特に大切です。何方かの道詠に「**欲深き人の心と降る雪は積もるにつけて道見えぬなり**」と。 善入院油掛地藏尊